# 豪華絢爛 商人の見栄

## キリコと生きる 日本遺産 ▶13◀

## ルーツを追う(下)

能登のキリコが登場する最も古い文献は、江戸時代初期のものである。当時はまだ小さく、笹の上部にあんどんをつけた一人持ちの灯籠だったと推測され、現在のように大型化したのは、町民の経済力が増した江戸後期と考えられている。

「先祖や神様はキリコを目印にやってくる。だから、より大きく、より高くなっていったんです」。民俗研究家、西山郷史さん(68)=珠洲市飯田町=はこう指摘する。

### 当代随一

各地で競うように巨大化していったキリコの中でも、当代随一のきらびやかさを誇ったと伝わるのが、1853(嘉永6)年の輪島大祭に担ぎ出された「中島屋の大切籠」だ。

このキリコは町単位でなく、時の豪商中島屋が単独で費用を賄った。北前船の交易を通じ、漆器業を中心に経済発展を遂げた輪島では、こうした「一軒出し」が他の商家でも見られ、町民を大いに喜ばせたそうだ。

中島屋のキリコは高さ12㍍の総輪島塗で、屋根上に金箔塗りのシャチが載り、四本柱には龍の精巧な彫り物が巻かれている。現代の職人に言わせれば、「少なく見積もっても3千万円はかかる」という豪勢な作りである。

西山さんは、キリコの一軒出しについて「『うちはこれだけのものを出せるぞ』という世間へのメッセージですね」と推察する。もうけをキリコにつぎ込み、羽振りのよさを示す。そんな商人たちの見栄が、祭りのにぎわいに花を添えた。

解体される前の姿

修復に向けて解体された「中島屋の大切籠」を確認する職人と関係者 =輪島市内

# 羽振りよく「一軒出し」

### 修復計画

中島屋の倒産後、キリコは1877(明治10)年に輪島市旧谷内村(現深見町)が買い取った。以降は村の祭りで担がれたが、やがて使われなくなり、1971(昭和46)年からキリコ会館で展示されるようになった。現在、傷んだ部分を手直しする計画が進んでおり、8月中にも作業が始まる。

「来年9月の秋祭りまでには復活させたい。立派な姿で村に帰したいんや」。深見町出身の自営業、岩坂紀明さん(48)=輪島市鳳至町=は、修復計画を提案した本人で、幼少期に見た雄姿が戻る日を心待ちにしている。

岩坂さんにとって、キリコは生まれ故郷の誇りだ。「何もない小さな村で、唯一、よそに自慢できるもんやったからね」。往事、民衆が抱いた豪華絢爛なキリコへの憧れは、時代を超えて受け継がれている。

(清水義晃)